

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

9 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,348.75 (7 日)	1,305.70 (1 日)
国内建値(円/g)	: 4,447 (5 日)	4,312 (28 日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 101.32 (27 日)	104.93 (5 日)

9 月の海外金相場は 1 日に\$1,305.70/toz(トロイオンス)と前月末から下げてスタートした。ところが、2 日には米国の製造業景況感指数の悪化を受けて反発、週明けの 5 日には\$1,320 台まで上昇した。前の週に発表された 8 月の米雇用統計が市場予想を下回り、米国の早期利上げ観測がやや後退したことも追い風となった。7、8 日と\$1,350 際まで近づき、ほぼ 1 か月ぶりの高値をつけた。9 日には北朝鮮が核実験を行ったが、その反応は限られた。

しかしながら、中旬においては、米国の早期利上げ観測が再燃し、金利を生まない資産である金の先安観が意識されたことで、金価格は続落し、16 日は\$1,308.35 とほぼ月初水準並みの安値に沈んだ。

下旬入りすると、21 日に米連邦公開市場委員会(FOMC)で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送ったことから、ドル安が進行し、金を買われた。23 日には\$1,338.65 まで上伸したが、イエレン米連邦準備理事会(FRB)議長が年内 1 回の追加利上げを見込んでいると明らかにしたことで、ドルの下値は限られた。また同時期、日銀が新たな金融緩和の枠組み導入を決定したことで、一方的なドル安とはならなかった。月末では、調整売りやリスク回避ムードの後退から下落、30 日には\$1,322.50 まで下げて越月した。

2. 為替相場推移

9 月の為替相場は 1 日に\$1=104.18 円(TTS 相場、以下同じ)と円安値圏からのスタートとなった。2 日に発表された 8 月の米雇用統計では非農業部門の雇用者数が前月比 15.1 万人増と、市場予想の 18 万人程度に届かなかったものの、予想と大きく乖離(かいり)せず、週明け以降も、スタート時の水準を保っていた。

ところが、7 日は\$1=102.37 円と前日に比べ 2 円程度円高・ドル安が進み、8 月 26

日以来約 2 週間ぶりの高水準に急伸した。前日の 6 日に公表された 8 月の米サプライマネジメント協会 (ISM) 非製造業景況感指数が 6 年半ぶりの低水準となったことで、早期の米利上げ観測が後退し、円高ドル安が強まった。ただ、週末では、米長期金利の上昇を受けて、日米金利差の拡大を見込んだ円売り・ドル買いが出て、ドルが若干戻したが、週明けでは、米経済指標の悪化により早期の米利上げ観測が後退したことで、\$1=103 円水準で再びドルが弱含みの展開となった。

下旬では、21 日に日銀が新たな追加的金融緩和を決定したが、同日に米連邦公開市場委員会 (FOMC) で金融政策の現状維持を決め、追加利上げを見送ったことで円高基調が続いた。ただ、イエレン米連邦準備理事会 (FRB) 議長が年内 1 回の追加利上げを見込んでいると明らかにしたことで、一方的なドル安とならず、円は前月末以来の \$1=101 円水準を突き破ることはなかった。月末は米大統領選挙の情勢からドルが買われ、円は \$1=102.12 円をつけて越月した。

対ユーロでも円は堅調に推移した。上旬は €1=117 円水準だったが、下旬では €1=114 円水準まで上昇し、2 か月半ぶりの円高・ユーロ安となった。

【国内】

1. 建値推移

9 月の国内金山元建値は 1 日に 4,370 円/g(グラム)と前月末より少し低下してスタートした。ところが、5、6 日には海外相場高と円安から 4,447 円をつけ、月間最高値となった。しかしながら、それ以降は月末にかけて、円高基調と海外の軟調相場から続落、12 日に 4,400 円台を割り込むと、28 日には 4,312 円と 4,300 円際まで低下し、ほぼ 1 か月ぶりの安値をつけた。月末では、若干反発し、4,325 円をつけて翌月入りした。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2016 年 8 月分=平成 28 年 8 月分)

生産 : 9,850 kg (前月比 11.6%増、前年比 9.1%増)

出荷 : 11,168 kg (前月比 40.3%増、前年比 22.1%増)

在庫 : 4,750 kg (前月比 21.7%減、前年比 4.4%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

8 月の生産は前月比、前年同月比とも 2 か月ぶりのプラス。出荷は円建て金価格の低下と前月の反動から大幅増、前年同月比も 3 か月ぶりの増。2011 年 11 月の 11,300 kg 以来の高水準。在庫は出荷増から前月比減だが、前年同月比は 8 か月連続の増。

銅

【海外】

2016年9月のLME銅相場は米国の早期利上げ見送り、ドル安、石油輸出国機構(OPEC)の原油減産合意などを材料に、月初の\$4,600/t水準から月末にかけて\$4,800圏へとジリ高傾向を辿った。

米国経済は8月の米供給管理局(ISM)製造業景況感指数(PMI)が6か月ぶりに50を下回り、非製造業PMIは2010年2月以来の低水準、非農業部門雇用者数は市場予想に届かず、失業率も4.9%で前月比横ばいにとどまった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は21日、利上げの見送りを決定した。ただし、イエレン米準備制度理事会(FRB)議長は「利上げの条件は整ってきた」と発言し、年内利上げの可能性を残したため、ドルの軟化は限定的であった。

中国経済は8月の国家統計局製造業PMIが2か月ぶりに50を上回った一方、1～8月の固定資産投資は1～7月比横ばい、前年同期比は1.8%増と1999年12月以来の最低にとどまるなど依然停滞している。

OPECの減産合意も銅相場の上昇要因となった。OPECは28日の非公式会合で原油生産を現在の3,324万bbl./日から3,250～3,300万bbl.に削減することに合意した。原油安への危機感とその背景で、OPECの減産は金融危機の2008年以来8年ぶり。これを受けてWTI、ブレント原油は最大で4%急伸した。

銅独自の要因として、LME在庫は前月に引き続き増加傾向を辿り、8月末には300千tを超え、9月28日現在379千tと2013年12月以来の高水準に達している。倉庫会社の在庫誘導インセンティブを背景に中国の過剰在庫、委託製錬契約の返還分がLME倉庫に持ち込まれているといわれる。

供給障害要因が数多くあった。PTフリーポートインドネシアのグラスベルグ銅金鉱山(インドネシア)で8月30日、労働者1名がコンテナ運搬車に轢かれ死亡した。事故現場は原因調査のため一時封鎖された。

コデルコのチュキカマタ銅鉱山(チリ)で8月30日、作業員輸送車と鉱山トラックの衝突事故により2名が死亡、4名が負傷した。同鉱山はチリ鉱山省地質鉱業局の操業停止命令により操業を停止したが、31日にオープンピット採掘以外の部門の操業を再開、9月5日にオープンピット採掘操業を再開した。

フリーポートマクモランのエルアブラ銅鉱山(チリ)で8月30日、鉄道貨車と硫酸輸送車の衝突事故により1名が死亡、3名が負傷し。同鉱山はチリ鉱山省地質鉱業局の操業停止命令により操業を停止したが、31日に再開した。

コデルコとサルバドル銅鉱山(チリ)労組の労働協約更改交渉は8月31日、労働者の73%が新協約案を受け入れたが、第2労組は拒否し、9月4日夜、ストライキを開始、9日に収拾した。協約期間は2年間。同鉱山は鉱石品位低下、コスト上昇

に直面する構造的なコスト削減計画を実施中で、新協約案にはコスト削減目標を達成した場合のボーナス支給が盛り込まれた。

アングロアメリカンのロスブロンセス銅鉱山(チリ)労組は8月31日、新労働協約案を拒否し、9月9日、無期限ストに突入したが、15日に新労働協約案を批准し、16日に職場復帰した。新協約の有効期限は2020年。

コンゴ民主共和国のザンビア国境付近の町、カスムバレサで9月9日、暴動が発生したため、国境が閉鎖され、コンゴからの銅の輸出が停止されたが、暴動は10日に沈静化し、銅の輸出も再開された。

BHP ビリトンのオリンピックダム銅金鉱山(豪)は9月28日、豪雪に伴う大規模停電のため生産を一時停止した。

OZ ミネラルズのプロミネントヒル銅金鉱山(豪)も9月28日、豪雪に伴う大規模停電のため生産を一時停止した。

需給状況については、国際銅研究会によれば、2016年1~6月の世界の銅鉱石生産は前年同期比4.5%増9,821千t、地金生産は2.9%増の11,491千t、消費は5.1%増の11,797千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲54千tから▲306千tへと供給不足幅が拡大した。報告在庫は15.5%減の1,287千t、在庫/消費比率は3.3週間から2.6週間に低下した。

鉱石生産の内訳は精鉱が6%増加、SXEWは1%減少した。国別には過去2年間に新規稼働と能力増強のあったペルーが50%増加したほか、カナダと米国が回復し、メキシコは能力増強により、モンゴルはオユトルゴイ鉱山の立ち上げにより増加した。しかしながら、チリは5.5%減少し、コンゴ民主共和国は減産により10%減少した。地域別にはアメリカが7%、アジアは6%増加したが、アフリカは4%減少し、ヨーロッパ、オセアニアは横ばいであった。鉱山稼働率は84.5%でほぼ横ばいであった。

地金生産の内訳は一次生産が2.5%、二次生産は4.5%増加した。国別には中国が6%、米国は16%、チリは2%、日本は3%増加したが、コンゴ民主共和国とザンビアは減産のため減少した。地域別にはアメリカが6%、アジアは5%、オセアニアは18%増加、アフリカは15%、ヨーロッパは4%減少した。精製工場の稼働率は82.7%から83.4%に上昇した。

消費は中国の見掛け消費が11%増加した。ネット輸入が20%増加したことによるもの。中国を除く世界の消費は横ばいであった。地域別にはヨーロッパが5%、アジアは7%増加(中国を除くアジアは2%減少)、アフリカは17%、アメリカは4%減少、とオセアニアは横ばいであった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

8/25 510 9/1 520 9/15 530

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2016年8月分=平成28年8月分)

生産 : 134,961t (前月比 0.1%減、前年比 1.7%増)
出荷 : 125,194t (前月比 9.6%減、前年比 5.6%減)
在庫 : 108,867t (前月比 10.7%増、前年比 1.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

平成28年8月の銅地金生産は前月比0.1%減、前年同月比1.7%増の135.0千tと、前年比は2か月連続の増加となった。出荷は前月比9.6%減、前年比5.0%減の125.2千tで、ともに2か月連続の減少となった。内訳は内販が前月比18.5%減、前年比4.7%増の67.5千tと1年ぶりの低水準。輸出は57.7千tで前月比は3.4%増、前年比は14.2%減と5か月ぶりの減少。内販のうち電線向けは前年比1.5%増の41.1千tと15か月ぶりの増加、伸銅品向けは13.8%増の22.5千tで3か月連続の増加。在庫は前月比10.7%増、前年比1.4%減の108.9千tで、前月比が3か月ぶりの増加、前年比は11か月連続の減少となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成28年8月の銅電線出荷は前月比5.2%減、前年同月比1.0%増の53.7千t(推定)と9か月ぶりの前年比増となった。うち内需は前年比3.3%増の52.4千tで14か月ぶりの増加、輸出は45.9%減の1.3千tで再び減少。内需の部門別には、自動車は4か月連続、その他内需、通信は2か月連続で増加したが、電気機械は23か月、建設電販は6か月、電力は5か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、平成28年8月の伸銅品生産は前月比7.8%減、前年同月比11.4%増の60.7千t(速報)と前年比は4か月連続の増加となった。うち内需向けは前年比12.0%増の50.9千t、輸出は8.0%増の9.8千tで3か月連続の増加。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が4か月連続の増加、自動車端子向けの黄銅条も再び増加、エアコン向けの銅管は前月の定修の反動で大幅増、コネクタ向けの青銅板条は一部メーカーの生産停止(前年8月末)も相まって16か月連続かつ大幅な減少となった。

4. 平成27年度伸銅品需要改定見通し

日本伸銅協会によれば、28年度の伸銅品生産は前年度比2.7%増の781千tと予想される。このうち内需向けは2.4%増の648千tの予想。主要品種別には、銅板条はディスクリート半導体向けが引き続き弱含み推移するが、自動車端子向けは自動車生産台数の回復により増加、民生用コネクタもスマートフォン向けが増加し5.3%増加する。銅管はルームエアコンの在庫調整が一巡し、パッケージエアコンも回復基調を辿っているため2.6%増加する。黄銅板条は自動車端子向けの増加により2.2%増加する。青銅板条はスマートフォン向けが好調ながら、前年、一部メーカーが

生産を停止した影響から 5.8%減少する。輸出向けは自動車向けに牽引され 4.4%増の 132 千tの予想。

平成28年度伸銅品需要改訂見通し(生産ベース)

平成28年9月
単位:1000t

	平成26年度 実績	平成27年度実績			27/26 (%)	平成28年度見通し			28/27 (%)	
		上期	下期	合計		上期	下期	合計		
銅	板条	270.1	124.1	123.5	247.6	▲ 8.3	130.4	130.4	260.8	5.3
	管	115.6	51.8	56.5	108.3	▲ 6.3	56.3	54.8	111.1	2.6
	棒	32.8	15.3	15.5	30.8	▲ 6.1	15.0	15.9	30.9	0.3
	線	3.8	1.6	1.6	3.2	▲ 15.8	1.5	1.6	3.1	▲ 3.1
	計	422.3	192.8	197.1	389.9	▲ 7.7	203.2	202.7	405.9	4.1
黄銅	板条	112.7	50.7	52.0	102.7	▲ 8.9	52.5	52.5	105.0	2.2
	管	8.6	4.6	4.5	9.1	5.8	4.0	4.5	8.5	▲ 6.6
	棒	183.8	87.3	92.2	179.5	▲ 2.3	90.3	95.0	185.3	3.2
	線	32.9	15.6	14.5	30.1	▲ 8.5	15.0	15.5	30.5	1.3
	計	338.0	158.2	163.2	321.4	▲ 4.9	161.8	167.5	329.3	2.5
青銅	板条	37.9	18.0	15.0	33.0	▲ 12.9	15.4	15.7	31.1	▲ 5.8
	棒線	3.8	1.9	1.8	3.7	▲ 2.6	1.9	2.0	3.9	5.4
	計	41.7	19.9	16.8	36.7	▲ 12.0	17.3	17.7	35.0	▲ 4.6
洋白他	13.0	6.6	5.6	12.2	▲ 6.2	4.9	5.7	10.6	▲ 13.1	
合計	内需計	672.1	313.6	319.8	633.4	▲ 5.8	322.6	325.8	648.4	2.4
	輸出	142.9	63.9	62.9	126.8	▲ 11.3	64.6	67.8	132.4	4.4
計	合計	815.0	377.5	382.7	760.2	▲ 6.7	387.2	393.6	780.8	2.7

(注)四捨五入による不突合あり
(出典)日本伸銅協会

鉛

【海外】

2016年9月のLME鉛相場は前半を\$1,900/t水準で推移していたが、後半に強調に転じ、月末には2015年5月以来の\$2,100台に乗せた。コールオプション契約の履行宣言日を控え、ロング筋がスクウィーズを仕掛けたことによる。

経済環境については、米国経済は8月の米供給管理局(ISM)製造業景況感指数(PMI)が6か月ぶりに50を下回り、非製造業PMIは2010年2月以来の低水準、非農業部門雇用者数は市場予想に届かず、失業率も4.9%で前月比横ばいとどまった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は21日、利上げの見送りを決定した。ただし、イエレン米準備制度理事会(FRB)議長は「利上げの条件は整ってきた」と発言し、年内利上げの可能性を残した。その後、ドルは軟化傾向を辿った。

中国経済は8月の国家統計局製造業PMIが2か月ぶりに50を上回った一方、1~8月の固定資産投資は1~7月比横ばい、前年同期比は1.8%増と1999年12月以来の最低にとどまるなど依然停滞している。

石油輸出国機構(OPEC)の減産合意も鉛相場上昇要因となった。OPECは28日の非公式会合で原油生産を現在の3,324万bbl./日から3,250~3,300万bbl.に削減することに合意した。原油安への危機感とその背景で、OPECの減産は金融危機の

2008年以來8年ぶり。これを受けてWTI、ブレント原油は最大で4%急伸した。

供給障害要因として、ニルスターが9月28日、ポートピリー鉛製錬所(豪)が豪雪に伴う停電で溶鉱炉が損傷したため操業を停止したと発表した。操業停止期間は10~14日間、損失額は3~5百万ユーロと見込まれる。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1~7月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比5.6%減の2,628千t、地金生産は6,213千tで横ばい、消費も6,170千tで横ばいとなった。地金需給バランスは前年同期の▲40千tから+43千tへとほぼバランス推移した。

鉱石生産はヨーロッパが1.1%、アフリカは2.2%増加したが、アジアは1.1%、アメリカは1.8%、オセアニアは34.1%減少した。国別にはオーストラリア、インド、米国が減少した。地金生産はアメリカが1.2%、オセアニアが2.8%増加したが、アジア、ヨーロッパは横ばい、アフリカは1.7%減少した。国別にはカナダ、カザフスタン、韓国の増加が中国の減少に相殺された。消費はアメリカが1.5%、ヨーロッパが9.4%増加したが、アジアは3.8%、アフリカは3.2%、オセアニアは10.0%減少した。国別にはドイツ、ポーランド、英国の増加が中国の減少に相殺された。7月末の地金の報告在庫は前年同月比1.7%増の529千t、在庫/消費比率は2.7週間から2.6週間へとほぼ横ばい。

中国は鉱石生産が1246千tで横ばい、鉛精鉱輸入は13.3%減の418千t、地金生産は3.8%減の2,476千t、地金のネット輸出は27千tから12千tに減少、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は6.4%減の2,427千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

8/1	244	8/8	239	8/22	248	9/1	253	9/5	260	9/13	249
10/3	270										

9月の鉛建値は、LME鉛相場が月末に急回復したことから、10月初旬270千円/tへ上昇した。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年8月分=平成28年8月分)

生産	: 17,180t	(前月比 0.9%増、前年比 2.6%増)
出荷	: 16,490t	(前月比 4.2%減、前年比 22.4%増)
在庫	: 25,764t	(前月比 4.1%増、前年比 13.6%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

8月の生産は前月比2か月連続の増、前年同月比も3か月ぶりの増。出荷は夏期休暇の影響から前月比2か月連続の減となったが、前年同月比は再び増加した。

これは蓄電池向け販売が前年よりも増加したため。蓄電池向けは今年に入り昨年の低水準から僅かながら回復基調を続けている。在庫は出荷減から前月比 2 か月連続の増だが、前年同月比は 11 か月連続の減と減少基調を継続中。

3. 需要部門動向

8月の自動車生産台数は前年同月比8.8%増の658,511台となり、3か月ぶりで前年同月を上回った。

乗用車は前年同月比3か月ぶりのプラス、トラックも同16か月ぶりのプラス、バスも同9か月ぶりのプラスとなった。

8月の自動車輸出台数は前年同月比1.5%増の327,291台となり、2か月ぶりに前年同月を上回った。

一方、8月の二輪車生産台数は前年同月比13.3%減の31,782台と4か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、7月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,913千個(前年同月比6%減)と2か月連続で低下、自動車用以外の鉛蓄電池も637千個(同3%減)と再び減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,550千個(同5%減)と4か月連続で低下した。

鉛関連製品生産統計

		7月	8月(速報値)
自動車	数量(台)	807,247	658,511
	前年同月比(%)	95.9	108.8
		6月	7月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,354	15,342
	前年同月比(%)	99.3	91.0

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2016年9月のLME亜鉛相場は前月に引き続き需給ファンダメンタルズの改善見通しを背景に\$2,200~2,300/t圏を堅調に推移した。

経済環境については、米国経済は8月の米供給管理局(ISM)製造業景況感指数(PMI)が6か月ぶりに50を下回り、非製造業PMIは2010年2月以来の低水準、非

農業部門雇用者数は市場予想に届かず、失業率も4.9%で前月比横ばいにとどまった。こうしたなか、米連邦公開市場委員会(FOMC)は21日、利上げの見送りを決定した。ただし、イエレン米準備制度理事会(FRB)議長は「利上げの条件は整ってきた」と発言し、年内利上げの可能性を残した。その後、ドルは軟化傾向を辿った。

中国経済は8月の国家統計局製造業PMIが2か月ぶりに50を上回った一方、1~8月の固定資産投資は1~7月比横ばい、前年同期比は1.8%増と1999年12月以来の最低にとどまるなど依然停滞している。

石油輸出国機構(OPEC)の減産合意も亜鉛相場上昇要因となった。OPECは28日の非公式会合で原油生産を現在の3,324万bbl./日から3,250~3,300万bbl.に削減することに合意した。原油安への危機感はその背景で、OPECの減産は金融危機の2008年以来8年ぶり。これを受けてWTI、ブレント原油は最大で4%急伸した。

供給関係では、ニルスターが9月27日、テネシー亜鉛鉱山(米)の再開準備に入ったと発表した。同鉱山は2015年12月、亜鉛価格低迷のため操業を休止したが、亜鉛価格が上昇に転じたため、来年第1四半期に鉱石生産、第2四半期に精鉱生産を開始し、11月までにフル能力50千t/年に到達する見通し。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1~7月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比6.0%減の7,424千t、地金生産は3.9%減の7,771千t、消費は7,945千tで横ばい、地金需給バランスは前年同期の+194千tから▲174へと供給不足に転じた。

鉱石生産はアジアが1.5%、アフリカは2.3%増加したが、アメリカは1.6%、ヨーロッパは2.0%、オセアニアは50.5%減少した。国別には中国が増加したが、オーストラリア、インド、アイルランド、ペルーが減少した。地金生産はアフリカが8.8%増加したが、アジアは4.2%、ヨーロッパは2.7%、アメリカは5.0%、オセアニアは2.6%減少した。国別にはムアズボロ製錬所が閉鎖されたインド、米国が減少した。消費はアジアが3.1%、ヨーロッパは1.9%、オセアニアは18.8%増加したが、アメリカは14.2%、アフリカは7.0%減少した。国別には中国、ヨーロッパの増加が米国、台湾の減少に相殺された。7月末の地金の報告在庫は前年同月比1.6%増の1,448千t、在庫/消費比率は5.3週間から5.6週間へとほぼ横ばい推移した。

中国は鉱石生産が7.5%増の3,124千t、亜鉛精鉱輸入は34.5%減の479千t、地金生産は3,533千tで横ばい、地金のネット輸入は96.0%増の296千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は6.0%増の3,823千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

8/1	280	8/9	283	8/17	277	8/22	283	9/1	289	9/6	292
-----	-----	-----	-----	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----

9/9 283 9/14 277 9/21 283 9/27 277 10/3 289

9月の亜鉛建値は、LME 亜鉛相場が月末にかけて反発したことから、10月初旬、289千円/tへ大きく上昇した。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年8月分=平成28年8月分)

生産 : 37,029t (前月比 2.7%減、前年比 6.7%減)

出荷 : 43,209t (前月比 2.8%減、前年比 4.2%減)

在庫 : 76,739t (前月比 7.4%減、前年比 0.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

8月の生産は前月に引き続き飯島、安中両製錬所の定修により前月比、前年同月比とも減。前年同月比は13か月連続の減。出荷は夏期休暇の影響から3か月ぶりの前月比減、前年同月比も10か月連続の減。しかし、亜鉛めっき鋼板だけが、前月比、前年同月比とも3か月連続の増。在庫は生産減から2か月連続の前月比減、前年同月比も2か月ぶりの減。

3. 需要部門動向

8月の鉱工業生産指数は前月比1.5%増、前年同月比4.6%増の97.9(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりのプラス、前年同月比は5か月ぶりのプラス。電子部品やパソコン、半導体製造装置など電機関連で生産が増加した。経産省は生産の基調判断を「一進一退だが、一部に持ち直し」から「緩やかな持ち直しの動き」に上方修正した。

前月の生産水準を上回った業種は、全15業種のうち11業種だった。電子部品・デバイス工業が前月比6.3%上昇。はん用・生産用・業務用機械工業も同1.9%伸びた。一方、輸送機械工業は同1.7%低下した。

8月の出荷指数は前月比1.3%減の94.6と3か月ぶりのマイナス、前年同月比は1.5%増と9か月ぶりのプラスとなった。

一方、在庫指数は前月比0.1%増の111.3とほぼ横這い。在庫率指数は前月比3.5%減の113.2と2か月ぶりに低下した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、9月が前月比2.2%の上昇、10月は同1.2%の上昇を見込んでいる。

7月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は前年同月比25か月連続の減と依然低迷。数量も22か月連続の100万t台割れ。

7月の伸銅品生産量は65,862t(確報値、対前年同月比+0.3%)(対前月比▲3.9%)で、3か月連続の対前年同月比プラスだが、増加幅は縮小した(6月+4.4%、7月+0.3%)。主要品種のうち、銅条は3か月連続の対前年比プラスで増加幅を拡大。銅管は4か月振りにマイナスに転じた。黄銅棒は3か月連続のプラス

で 15 千 t 前後の水準となった。また、黄銅条は 8,567t(前年同月比、内需▲1.0%、輸出+2.9%)で、2 か月連続の 8 千 t 台となった。

亜鉛関連製品生産統計

		6 月	7 月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	817,049	884,350
	前年同月比(%)	92.8	93.8
黄銅製品	数量(t)	28,657	27,551
	前年同月比(%)	104.6	98.9
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,571	1,576
	前年同月比(%)	90.4	84.5
亜鉛華	数量(t)	5,227	5,780
	前年同月比(%)	96.3	101.6

(出所:経済産業省生産動態統計調査)